

受験番号		氏 名		クラス		出席番号	
------	--	-----	--	-----	--	------	--

試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

# 2014年度 第 3 回 全統マーク模試問題

## 国 語 (200点 80分)

2014年10月実施

### 注 意 事 項

- 1 解答用紙に、正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 2 この問題冊子は、47ページあります。問題は4問あり、第1問、第2問は「近代以降の文章」、第3問は「古文」、第4問は「漢文」の問題です。  
 なお、大学が指定する特定分野のみを解答する場合でも、試験時間は80分です。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10
----

 と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。

問題を解く際には、「問題」冊子にも必ず自分の解答を記録し、試験終了後に配付される「学習の手引き」にそって自己採点し、再確認しなさい。

河合塾





国

語

(  
解答  
番号

1

、

36

## 第1問

以下は、「いつの頃からか、政治において語られる個人のイメージは、かなり独特なものになったようだ。」という書き出しで始まる章の一節である。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点 50）

近代政治思想の人間像に、興味深い表現を与えた一人に、カナダの政治理論家チャールズ・テイラーがいる。<sup>（注1）</sup>

テイラーは、近代における「世俗化」という大問題に取り組んでいる。<sup>（注2）</sup> マックス・ウェーバーを持ち出すまでもなく、近代化とは「世界の脱魔術化」であり、宗教的なものの後退として特徴づけられる、という理解はいまだに根強い。

自身がカトリック信者でもあるテイラーは、世俗化とは脱宗教化であるという理解に異議を申し立てる。テイラーは、自らの宗教論を『世俗の時代』という大著にまとめているが、この本のなかで、彼は面白い表現を使って、近代における人間像の変化を説明している。それがすなわち、「緩衝材で覆われた自己」である。物と物との間にあって、両者の衝突を食い止めるものをバッファー（緩衝材）というが、あたかもバッファーによって覆われたかのような個人のあり方を、テイラーはそう呼んだのである。

「緩衝材で覆われた自己」と対比されるのは、「孔<sup>あな</sup>だらけの自己」である。たしかに人間の身体には、いくつもの孔がうがたれている。テイラーのいう「孔だらけの自己」とはもちろん、そのような物理的な意味での「孔」ではないだろう。彼のいう「孔」とは、一つのメタファー<sup>（注3）</sup>に過ぎない。カン<sup>（ア）</sup>ジンなのは、外部からの影響がただちに自分のなかに浸透してくることである。「孔」があれば、どうしても外から何かが入ってくるし、自分からも抜け出てしまう。その意味で、「孔だらけの自己」とは、外からの影響を受けやすい、ヴァルネラブルな（脆弱<sup>ぜいじやく</sup>で、傷つきやすい）存在なのである。

外からの影響といった場合、テイラーがとくに注目するのは、いうまでもなく精神的な影響である。「孔だらけの自己」として、自分の外に何かしら強力かつ重要な精神的存在があり、自らの精神もまた、その影響を受けやすく感じられる。神や精霊の存在は、そのわかりやすい例であろう。神の「お告げ」はただちに自らの精神に届き、その影響は身体に直接作用する。

これに対し「緩衝材で覆われた自己」の場合、自分のまわりを、何かしら厚い「緩衝材」が覆っていることになる。その「緩

衝材」のおかげで、自分は外界に直接さらされずに済んでいる。言い換えれば、外に対して「距離」をとることもできる。結果として、人間には境界線によって外界と隔てられた「内面」が形成され、その「内面」が自分にとってのあらゆる意味の源泉となるのである。

これはまさしく、テイラーにとっての「近代的自己」の像なのであろう。しばしば抽象的に人間の内面性や自律性と呼ばれるものの背景に、ある種の身体性を含む、<sup>A</sup>人間の内と外との関係をめぐる感覚の変質を読みとる点に、テイラーの議論のユニークさがある。

前章では、経験について考えた。経験とは、その語源が示すように、「(向こうに行つて) 調べる、試す」ことを意味する。言い換えれば、いまいる場所から違う場所へと移動することが、その前提となっている。

これに対し、近代の「緩衝材で覆われた自己」とは、自らの内面に<sup>(イ)</sup>テツタイし、そこから世界をうかがい、あるいは操作しようとする存在である。あらゆる意味は自らの内面からのみ生まれるのであって、自分の外部は統御すべき対象でしかない。

「緩衝材で覆われた自己」にとって、内に閉じこもって、外界のすべてを制御下に入れることが自律である。彼らは、外からの影響を断てば断つほど、自由になれると信じている。近代的個人は、世界から自分をより疎隔することの代償として、自由の感覚を得たといえるだろう。

いわゆる「世俗化」についても、テイラーはこのような自己イメージの変質によって説明する。<sup>B</sup>彼はしばしば指摘される「世俗化」の定義を退ける。例えば、国家の公的な領域から宗教を排除するのが世俗化であるとか、宗教の影響力が後退していくことが世俗化であるといった理解を、テイラーは採用しない。

それではテイラーは、どのように世俗化を理解するのか。彼にいわせれば、そもそも、外界からの精神的影響を排除することのできない「孔だらけの自己」にとって、「不信仰」という選択肢は事実上存在しなかった。

これに対し、自分が外界から厚い障壁によって隔てられていると考える「緩衝材で覆われた自己」の場合、自らを超えたところに存在する価値の源泉を認めず、すべての意味は自分の内面にあると信じることも可能である。

そうだとすれば、「世俗化」とは、煎じ詰めれば、このような「不信仰」という選択肢があるかどうか、ということに等しい。一五〇〇年頃の西欧社会では、事実上そのような選択肢は存在しなかった。これに対し、現代社会では、「(自己を越えた価値の源泉を) 信じない」という選択は完全に社会的に承認されている。「世俗化」されているか否かとは、結局はその違いに<sup>(ウ)</sup>カンゲンされるとテイラーという。

このようなテイラーの「世俗化」論の妥当性を、ここでこれ以上論じようとは思わない。ただ、「緩衝材で覆われた自己」とは歴史的に生み出された一つの装置であり、けっして時間を越えた自明の真理ではないという彼の<sup>(エ)</sup>ドウサツは、重要な意味をもつことを確認しておきたい。

というのも、近代の政治学はこのような自己の必要から生まれ、このような自己のあり方をその理論に組み込むことで発展してきたからである。もう少し説明しよう。

近代の政治学の出発点は、政治が宗教から自立したことにある。宗教内乱の結果、政治にとっての宗教は、自らを支えてくれる後ろ盾であるどころか、むしろ不安定化の原因になりかねない重荷となった。

このような局面において、政治にとっての負担を軽減するためには、政治を宗教から切り離すしかない。そこで打ち出されたのが、政治をもっぱら人間の外面に関わる事柄を扱うものとして限定する、という方向性であった。そのような意味での「政治の自立化」が、近代の最初のベクトル<sup>(注4)</sup>となったのである。

政治の本質を実力や強制の契機に見出し、政治の道徳からの自立を説いたニッコロ・マキアヴェリは、このような意味での「政治の自立化」をいち早く主張した理論家であるが、彼の同時代人に、宗教改革者であるマルティン・ルター<sup>(注6)</sup>がいたことはけっして偶然ではないはずだ。

表面的にみれば、マキアヴェリとルターとは、およそ異質な思想家に思える。とはいえ、結果からすれば、二人は、人間を内面と外面に分離できるという考えを強化する上で、ともに重要な役割をはたしたことになる。政治を人間の外面にのみ関わるものとしたのがマキアヴェリであるとするれば、宗教を人間の内面的事柄として純粹化したのがルターであった。その限りで、二人

はまさにコインの表と裏であったともいえる。

逆にいえば、それ以前において、宗教とはけっして純粹に内面的な事柄ではなかった。宗教的儀礼を持ち出すまでもなく、宗教と身体性は不可分であった。また「魔術化された世界」において、人間の外部には、至るところに聖なるものの現れを見出すことができた。その意味で、信仰とはけっして「内面」の事柄ではなかったのである。

政治もまた、古代ギリシア以来、自由をはじめとする人間の内面的価値と不可分とされてきた。政治とはまさに人間性を開花させるためのものであり、内面的価値と切り離すことはできなかった。その意味からすれば、政治を純粹に実力や強制と結びつけて考えたマキアヴェリの方が、イ<sup>(オ)</sup>タ<sup>(ン)</sup>的であったのである。

とはいえ、「緩衝材で覆われた自己」の確立によって、人間の内と外が分断されることになり、それにとまって、宗教と政治も分離されることになる。結果として生じたのが、政治の基礎の問い直しであった。というのも、宗教をはじめとする内面的諸価値から切り離されることで、政治は「やせこけた概念」になってしまったからである。

〔注7〕「十六世紀、十七世紀ぐらいまでは平和の実現に政治の役割を限定することに意味があった。ところが、成功して、平和が確実に実現されてしまうと、平和の実現のためにという政治の役割の意味自体が薄れてきて、自らの基盤が崩壊を始めるという話に逆になってくる」。政治にとって、目標を達成することによって自らの存立の目的が問われるという皮肉な事態が生じたのである。

個人の自然権によって政治社会の設立を正当化する社会契約論<sup>(注8)</sup>の登場も、このような文脈において理解することができるだろう。宗教などの内面的価値から切り離されることでやせ細ってしまった政治の概念を、あらためて所有権を中核とする人権の理論によって意味づける必要が生じたのである。このことは、**C**「政治の自立化」という最初のベクトルが、「人権による正当化」という第二のベクトルによって補完されたことを意味する。

しかしながら、言うまでもなく、このような近代社会契約論もまた、「緩衝材で覆われた自己」と不可分なものであった。<sup>(注9)</sup>ジョン・ロックを参照するまでもなく、所有権の理論は「個人が自らの身体を自己所有する」という理解と不可分であった。自

分の体は自分のものであって、他の誰のものでもない。それゆえ、自分の体は自分で好きなように処分できる。さらに、自分の体を使った労働によって生産したものも、自分の所有物となる。このような考え方こそが、所有権の理論を支えたのである。

ここにあるのは、自分の精神が自分の身体を所有し、排他的な処分権をもつという考え方である。さらに、その前提にあるのは、外部からの影響を断ち、自分の内面へと閉じこもった自己が、自らの身体を足がかりに、自分の外にあるものを所有の対象として捉え直していき、という志向であった。

所有権の理論とは、このような志向を正当化するものであり、ひいては所有権理論に立脚する近代社会契約論もまた、このような新たな自己イメージの産物であった。その意味で、**D**「緩衝材で覆われた自己」とは、近代政治思想にとってきわめて重要な位置を占める要素であったといえるだろう。

とはいえ、近代政治思想のある種の行き詰まりが明らかになった今日、このような「緩衝材で覆われた自己」もまた再検討の対象にならざるをえない。

(宇野重規<sup>うのしげき</sup>『民主主義のつくり方』による)

(注) 1 チャールズ・テイラー——カナダの政治哲学者(一九三一～)。

2 マックス・ウェーバー——ドイツの社会学者、経済学者(一八六四～一九二〇)。

3 メタファー——隠喩。

4 ベクトル——方向性をもつ力。

5 ニッコロ・マキアヴェリ——イタリアの政治思想家(一四六九～一五二七)。

6 マルティン・ルター——ドイツの神学者(一四八三～一五四六)。

7 「十六世紀、十七世紀……」——佐々木毅『宗教と権力の政治』による。

8 社会契約論——ここでは、ホッブス、ロック、ルソーに代表される近代政治思想のこと。原始的な自然状態から契約によって国家が



成立すると見なす。

9 ジョン・ロック——イギリスの哲学者（二六三―一七〇四）。

問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

①  
⑤

(ア)

カンジン

①

- ⑤ ジンチュウ見舞  
④ ジンギを守る  
③ リフジンな仕打ち  
② ジンソクな対応  
① 火のヨウジン

(イ)

テツタイ

②

- ⑤ 議事内容をテツキする  
④ テットウテツビ反対の立場を貫く  
③ 民主主義のテツソク  
② 発言をテツカイする  
① テツキを追跡する

(ウ)

カンゲン

③

- ⑤ 任務をカンスイする  
④ 福祉のイツカン  
③ トウカンに付す  
② カンレキを祝う  
① 証人を法廷にシヨウカンする

(エ)

ドウサツ

④

- ⑤ シュドウ権を握る  
④ 制度がクウドウ化する  
③ ビドウだにしない  
② 両者のイドウを調べる  
① ドウラクにふける

(オ)

イタン

⑤

- ⑤ 事件のホツタンとなる  
④ 平和をタンキユウする  
③ タンソクを漏らす  
② タンリヨな行動を慎む  
① カンタンな問題から解く

問2

傍線部A「人間の内と外との関係をめぐる感覚の変質」とあるが、それによって自己のイメージはどのように変わったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 外部へと働きかけることのできる身体性を備えた具体的な存在としての自己から、外部とは隔絶され、抽象的な意味での内面性や自律性を備えた自己へと変わった。
- ② 内面に閉じこもって外界を自らの意志で自在に制御することができる自律的な自己から、心も身体も外部からの影響を受けざるをえない、傷つきやすく受動的な自己へと変わった。
- ③ 心身ともに外からの影響を受けてしまうような内外の境界が不明な自己から、外界と隔てられた内面に閉じこもって、そこから外界を統御するような自己へと変わった。
- ④ 外界を自由に移動しつつ経験を積むことのできる開放的な自己から、自らの内面に引きこもり、外界のすべてを意のままに操作しようとする閉鎖的な自己へと変わった。
- ⑤ 外部からの影響が自分のなかに浸透してしまいうような内と外が分断された自己から、外界に直接さらされずに済むような、外部に対して距離をとる自己へと変わった。

問3

傍線部B「彼はしばしば指摘される『世俗化』の定義を退ける。」とあるが、テイラーは近代における「世俗化」をどのように理解したのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 世俗化の本質は、宗教の影響力が後退していくところではなく、信仰を持たないという選択肢が事実上存在せず、すべての意味が自分の内面にあると信じられるようになるところにある。
- ② 世俗化の本質は、脱宗教化が進行するところではなく、自分の外にある重要な精神的存在の影響を受けつつも、自分の内面によって自由に外界を操作することが可能になるところにある。
- ③ 世俗化の本質は、国家が公的な領域から宗教を排除するところではなく、社会的な要請から個人が「不信仰」を選ばざるをえず、私的な領域から宗教を排除してしまうようになるところにある。
- ④ 世俗化の本質は、世界から宗教的なものが後退するところではなく、自分の外にある強力な精神的存在に左右されず、自分の内面をすべての意味の源泉と見なせるようになるところにある。
- ⑤ 世俗化の本質は、神や精霊を「信じない」ところではなく、神を自らを超えたものとしてではなく、外界から切り離された内面に存在するものとして信じることができるようになるところにある。

問4

傍線部C「『政治の自立化』という最初のベクトルが、『人権による正当化』という第二のベクトルによって補完された」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

8。

- ① 政治が共同体から解放され、個人の外面に関わる事柄を扱うものとして限定されたことで、政治の存立の目的が問われることになってしまったため、政治の概念を基礎から問い直さざるを得なくなってしまうということ。
- ② 政治が宗教や世俗権力から独立し、精神的支柱を失ったことで、政治が豊かなものではなくなってしまうため、宗教などの内面的価値によって政治の概念を問い直すことを余儀なくされるようになったということ。
- ③ 人間の内面と外面が切り離されたことで、政治の役割の意味が薄れてきてしまったため、人権の理論に基づいて、政治の概念を人間の外面的価値によって再び意味づけざるを得なくなってしまうということ。
- ④ 政治が宗教から切り離され、人間の内面的事柄として純粹化されてしまったことで、政治がやせこけたものになってしまったため、人間性に基づいた人権の理論によって政治の概念を正当化する必要が生じたということ。
- ⑤ 人間の内面と外面とが切り離して捉えられ、政治が外面にのみ関わるものと見なされるようになって、政治の基盤が揺らいでしまったため、自己を端緒とする人権の理論によって政治の概念を意味づけ直す必要が出てきたということ。

問5

傍線部D「『緩衝材で覆われた自己』とは、近代政治思想にとってきわめて重要な位置を占める要素であったといえるだろう」とあるが、ここで筆者はどのようなことを言っているのか。本文全体の内容に於いて最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 古来、人間の内面的価値にのみ関わるものであった政治が、人間を内面と外面に分離する自己イメージにより外面にのみ関わるものと見なされることで、近代政治思想が発展したという事実注目すべきだ。
- ② 人間を内面と外面に分断するような自己イメージこそが、政治の宗教からの自立化を促し、近代政治思想を支える個人のあり方をも規定したが、そうした自己イメージはかならずしも絶対的なものではない。
- ③ 近代政治思想を再検討するうえで、その基盤となる個人のあり方の根底には、人間を内面と外面が相互浸透を通じて現実を操作していくものと見なす近代的な人間像があったということを見捨てるわけにはいかない。
- ④ 外界と隔絶された内面を特権化するような近代的な自己イメージによって政治の概念が貧困化したが、近代政治思想の存立を支えるのもそうした自己イメージであるという事実は、解決しがたい矛盾である。
- ⑤ 内面を中心とした近代的な人間像の歪<sup>ゆが</sup>みが問題視されるなか、世界との一体化が果たされていた前近代的な世界観を復活させるために、近代政治思想における人間像の問題点を精査する必要がある。

問6 この文章の表現と構成について、次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) この文章の表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

① 「だ・である」という強い書き方の中に、「ようだ」や「だろう」などの優しい調子の文末表現を加えることにより、文学的なスタイルが確立されている。

② 「緩衝材で覆われた自己」や「孔だらけの自己」といった表現を用い、読み手に適切なイメージを想起させることで、内容が理解しやすくなっている。

③ 「メタファー」や「ベクトル」などの外来語を用いることにより、そのつど前後の文脈への注意が喚起され、論理の展開が読み取りやすくなっている。

④ 「世俗化」や「内面」などの印象的な比喩を用いつつ、比較的短い段落を積み重ねていくことにより、内容にまとまりが生じ、読み進めやすくなっている。

(ii) この文章の構成に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は 11。

- ① この文章は、冒頭で本文全体の結論が提示され、それに続く部分で次第にその結論が論証されていくという構成になっている。
- ② この文章は、前半で議論の前提となる事柄が述べられ、後半でその前提に基づいて議論が展開していくという構成になっている。
- ③ この文章は、起承転結のかたちで議論が進められており、議論の中盤でそれまでの内容が覆されるという構成になっている。
- ④ この文章は、具体的な事例をもとに三つの話題が並列的に提示され、最後に問題提起がなされるという構成になっている。



（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

第2問 次の文章は、井伏鱒二の小説「増富の谿谷」の全文である。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、本文の数字は行数を示す。（配点 50）

数年前の九月上旬、釣師の佐藤垢石老に連れられて本谷川へやまめ釣に行った。釣果は（ア）思わしくなかったが、そのころ釣というものに大して興味を持たなかった私は、それよりも本谷川の区切り取っている谿谷風景に満足した。

この谿谷を増富の谿谷という。九月だというのに尚まだ山楓が若芽を出し、それが若芽のまま紅葉しかけていた。突如として聳える岩山が、紅葉した蔦の葉ですっかり覆われているのも見た。溪流は真下に見え、谷向うの山にはところどころに炭焼の竈があった。その竈から取出した炭火が木の間に赤く妖しげに見え、炭火のほてりは谷を距てていながら私たちの頬に感じられた。谷がそんなに間近かく迫っていた。

私たちはその川かみの鉾泉宿に一泊し、翌朝、早く出発して棧道を川しもに向って引返して来た。すると急に谷が拡がって見える切通しの下り口に、大きな胡桃の木があった。青い実が鈴なりに枝についていた。幹は三人で抱えてもまだ抱えきれないような大きさで、こんな大きな胡桃の木はまだ見たことがなかった。私は不可解なような気持がした。それはこの木が単に大きすぎるからではなくて、昨日この山路を来るとき、なぜこんな珍しい大きな木に気がつかなかったろうという疑いであった。

垢石老も不思議そうに胡桃の木を見ていたので、私はたずねた。

「翁や、この木は、昨日もこの道ばたにあったかしら。僕は、つい見なかったと思うんだけど、翁は、見たかね」

垢石老は白い口髭を喰い反らせ、溪流の音をきくような恰好で首をかしげ、その胡桃の木を穴のあくほど眺めていた。漸くにして彼は口をひらいた。

「はて、こいつは俺も見なかった、と思うんだがね。どうも変だ。こりゃ、まアるで変なもんだ」

「この切通しは、こんな爪先あがりになっている。だから僕たち、ここを登るとき足もとばかり見ていたんだろうか。それにしても、下枝がこんなに垂れさがって、道にかぶさっている。気がつかない筈がない」

「この枝は、雪の重みか実の重みで、こんなに垂れ下ったんだろう。多年にわたる天然の仕業だね。きょう、急にここに移植したのじゃない。根元に山牛蒡ごぼうも生えている」

20

不図ふと、垢石老は後を振向いた。私も振向いたが誰もいなかった。

私たちは胡桃(ウ)の詮索を止め、川しもの方向に向かって歩いて来た。このあたりから路は暫く平坦へいたんになり、両側の山は互に広い間合を持って、この山奥にいきなり孤立して一つの盆地が打ち開かれている。耕地や水田のはずれに人家も見え、棚田の石崖の下を行く路は可なり広い幅になっている。

私たちは人家が行手に見えるので元気づいていた。

A 煙草屋たばこがあった筈だから煙草を仕入れよう、もしその店にラムネを売っ

25

ていたら飲んで行こうなどと語り合っていた。

すると路の曲り角で、ぱったり二人の娘に会った。一人は二十ぐらいで、紺がすりの着物をきて手拭てぬぐいをかぶり、目籠を背負っていた。一人は、一つ二つぐらい年下に見え、同じような服装で矢張り目籠を背負っていた。それが二人とも、あまりに美しかったので、私たちは立ちどまった。娘さんの方でも立ちどまり、手拭をとって私たちにお辞儀をした。その物腰に垢石老は好奇の瞳を向け、白い口髭をじつくりとまた喰い反らせた。

30

二人の娘さんは黙って行きすぎようとした。それは何か、尊いものが消え失せて行っているかのように思われた。咄嗟とつさに私は娘さんと呼びとめた。

「ちょっと伺いますが、バスの乗場に出るには、どう行ったらいいでしょうか」

年上の方の娘さんは、落ちついて川しもの方を指さした。

「この路を、どこまでもおいでになりますと、バスの乗場に出ます。路は一本路です」

35

「どうも有難う。つまり、この路をどこまでも行くと、バスの乗場に出るのですね。路は一本路ですね」

娘は軽く頷うなずいた。しかし、ただそれだけのことであった。

私たちは娘の後姿が見えなくなるまで見送っていた。垢石老は目をこらして見ていたが、路の曲り角に娘の姿がかくれると、

口をひらいた。

「B すごいなあ、これは。まあで、鄙ひなまれだ。まあで絵のようだ。俺は、方々の田舎に釣に行くが、あんなきれいな鄙まれは見たことがない」

鄙まれとは、鄙にまれなる乙女の略語である。垢石老の即席造語かどうか知らないが、私も垢石老におとらず感歎かんだんの言葉を連発した。

「きれいだったなあ。いや、悪くない。あんな美しい恰好で、空間を占領していたら、きっと美の神が妬ねたむだろう。もしもし翁や、翁は、いま若返りたいと痛感してるだろう」

「いや、まあで妙なものだ。ところがお前さんは、バスの乗場を知っていながら路をたずねた。これは旅の心得として、先まず、こういったらいいものだろうな」

「でも、幾いく山河やまがわを越えて行っても見よだ。ねえ翁や、実際そういう感慨ではないだろうかね」

「C まあで、そんなもんだろうな」

私たちは娘の消え去って行った方を見ながらまだ立ちどまっていたが、漸くその場を離れて来た。

——それは数年前にあった話である。ところが今年の夏、田中貢太郎氏が土佐から出京され、その歓迎会の席で私は村松梢風氏に会った。

私は村松氏と将棋をさして、それからいろいろと旅の話や世間ばなしをしているうちに、どちらが云いいだしたともなく増富谿谷の話になった。

村松氏は今から二十何年前に、増富の奥ヘラヂューム鉱泉の視察に行ったという。その鉱泉はラヂュームの含有量が世界で第二番目だという評判であった。それで、その方面の専門の研究家に連れられて二人旅で行ったのだそうである。

それを聞いて私も、増富の奥には数年前に垢石老と二人で出かけたことがあると云った。そして、帰り途に鄙まれを見たことを思い出し、それを云おうとすると私より先に村松さんが云った。

60

「あの谿谷では、君、とてもきれいな娘を僕は見たんだよ」

「いや、僕も見ました。そりゃ、とても鄙まれで……」

しかし村松さんが云った。

「まあ聞きたまえ。君も知ってるだろうが、あの増富の谿谷は、山と山が手を合わせたように迫っている。ところが、たった一箇所、急に谷が広くなって水田や畑の見える……」

「それは、胡桃の木のあるところでしょう。増富鉱泉から帰って来ると、大きな胡桃の木が切通しの下にあるでしょう」

私が一種の期待をもったとずねると、村松氏は頷いた。

65

「そうだ、大きな胡桃の木があった。二た抱えもあるだろう」

「いや、三人でもまだ抱えきれないでしょう。僕は行く路では見なかったんですが、帰りに気がついて、大きな木だから驚きました」

「そうか、僕も行きには気がつかなかったが、帰りに気がついたね。もう二十年も前だが、僕も胡桃の木は覚えてる。あの胡桃の木のすこし川しもへ来たところで、何しろ、美しい娘に会ったのだからね」

70

私の驚きは重複した。

「僕もあの胡桃の木の、すこし川しものところで会ったんです。とても鄙まれの……」

「いや、それが君……」

村松さんは静かに手を私の方に出して来て、空間をつかむようにその手をひろげて云った。

75

「僕と友人が二人で帰って来ると、石崖の下の曲り角でぱったり会った。娘も二人連れだね。妹と姉さんだろう。紺がすりの着物きて、それがお揃みそろいたいな紺がすりなんだ。それから姐あねさんかぶりに手拭をかぶって、目籠を背負っていた。僕たちを見ると、手拭をとって、ちよつと軽くお辞儀をして通りすぎたね。その風情といい、その容貌といい、それは君、まあ何といって形容したらいいか、もうまるで誰かの絵のようだったね……」

「いや、ちょっと待って下さい」

私は何か寒気のようなものを覚えた。

80

「僕の見たのとそれは、そっくり同じです。お揃のような紺がすり、姐さんかぶり、目籠。それで貴方の見た娘は、目籠のなかに草をいっぱい入れていましたか。僕の見たのは、ほんのすこし籠の底に入れていました」

「僕の見たのと同じだね。何しろ九月上旬ごろだったから、刈取った草の茎は長かった。年は二十ぐらいのと、十八九ぐらいかね」

85

「それでは、貴方はその娘に、バスの乗場に出る路をたずねましたか。路を知ってながら、わざとたずねなかったのでしょうか」  
「まさか……僕が行ったのは二十何年前なもの、バスなんか通ってなかった」

その点が違うだけで、あとは申し合えたようにみんな一致していた。 **D** 私は胡桃の木の垂れ下った下枝を思い出し、棚田の石崖の下をながれるきれいな溝川を思い出した。

——私はこの話を、石田君という去年大学卒業の青年に話した。 **E** すると石田君は目を光らせて、自分も増富の谿谷に是非とも行くと云い出した。

90

「では、さっそく行って見ます。山と山の間隔が広くなって、水田のあるところですね。行きには僕、切通しのところは下を向いて歩きます。いや、下を見ないで平気で歩きます。でも、僕が行って来るまで、この話を怪談風に人に話さないで下さい。僕、怪談は嫌いです。それに、この話は怪談ではなくて偶然の話ですからね。僕、その偶然を求めに行くんですから」

石田君は自分自身に云いきかせるかのように、指折り数え二十何年間の年月を計算した。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 12 14。

- (ア) 思わしくなかった
- 12
- ⑤ 考えたくなかった

④ なかなか改善されなかった

③ 最悪なものだった

② 納得できるものではなかった

① 予想外のものだった

- (イ) 鈴なりに
- 13
- ⑤ 細かくびっしりと

④ こぼれ落ちそうなほど

③ たくさん群がって

② 賑やかな感じで

① 数多くあちこちに

- (ウ) 詮索
- 14
- ⑤ 物事の生じた根源を突きとめようとする

④ 似たような事例にてらし合わせて類推して

③ 仮説を立て実証的に真実を導き出そうとする

② 考えても仕方のないことをあえて考えてみる

① あれこれ探って明らかにしようとする

問2

傍線部A「煙草屋があった筈だから煙草を仕入れよう、もしその店にラムネを売っていたら飲んで行こうなどと語り合っていた。」とあるが、ここでの「私たち」についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 15。

- ① 往路では胡桃の木を見逃していたことがわかり、自分たちの愚かさを思い知らされて気落ちしていたが、景色が変わったのを機に、もとの元気を取り戻している。
- ② 胡桃の木の謎について考えてみても埒<sup>さだ</sup>があかず、やや苛<sup>いら</sup>立っていたが、煙草や飲み物を口にすれば気持ちが悪く落ち着くのではないかと感じ、明るい気分になりはじめている。
- ③ 自分たちが何かに取り憑<sup>つ</sup>かれているような気がして、気味悪さにおののいていたが、人里につけばそうした気味悪さを振り払えそうなので、思わず足を速めている。
- ④ 不気味な出来事に遭遇したことで、自分たちの身にこれからよくないことが起こりそうだと予感していたが、そうした恐怖感を振り払おうとして、つとめて明るく振る舞っている。
- ⑤ 不可解な体験をしたこともあり、どこか心細くなっていたが、人家が見えてきたことで日常を取り戻したような気分になり、景気をつけるようなことを言い合っている。



問3 傍線部B「すごいなあ、これは。」から傍線部C「まあで、そんなもんだろうな」までの「私」と「垢石老（＝翁）」との会話について、最も正しく説明しているものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16。

- ① 翁は、美しい娘たちに出会えた僥倖<sup>きようこう</sup>を率直に表明したが、そんな翁に対して「私」は、若い娘に年甲斐<sup>としがひ</sup>もなく惹かれてしまったのではないかと揶揄<sup>やゆ</sup>するような言葉をかけた。そして翁も応じるように皮肉めいた言葉を口にするが、最終的に二人は、娘たちの美しさはどんな苦勞をしても見る価値があるということを、互いに確認し合うことになった。
- ② 翁は、偶然に出会った娘たちについて、そのたぐいまれな美しさを絶賛したが、そんな翁に対して「私」も、同じような感想をもったことを表明した。その後、翁は「私」の娘たちへの振る舞いのあやまちについて教え諭したが、「私」はそれには応じず、結局は二人とも、娘たちの美しさについて、それぞれ自分なりに思いを馳<sup>は</sup>せることになった。
- ③ 翁は、娘たちがいかに美しかったかということを独特な言葉づかいで説明し、それに対して「私」も、翁の意見に対して素直に賛同の意を表明した。しかし、翁が「私」に対して旅の心得などを説きはじめたので、「私」は気分を害してしまい、翁の前でややふてくされたような態度をとったが、そのせいで翁も困惑してしまった。
- ④ 翁は、滅多に見えないような美しい娘たちに出会った喜びを素直に口にしたが、それを聞いた「私」は、翁はいつまでも気が若いと、からかうような言葉をかける。その後も翁は、自分がいかに娘たちに魅力を感じているかということを真摯に説明しようとするが、「私」のほうはさらに翁をからかい続け、翁はやや気分を害してしまった。
- ⑤ 翁は、偶然出会った娘たちの美しさに対して感謝<sup>かんたん</sup>の言葉を惜しまなかったが、「私」のほうは、そんな翁に調子を合わせることに、やや恥ずかしさを感じていた。すると、翁が旅先ではもっと素直になるべきだという心得を説いたため、「私」も娘たちの美しさを素直に賞賛し、翁もそんな「私」の言葉を聞いて、それなりに納得することになった。

問4

傍線部D「私は胡桃の木の垂れ下った下枝を思い出し、棚田の石崖の下をながれるきれいな溝川を思い出した。」とあるが、ここでの「私」の心情を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

- ① 村松氏が何と言おうと、自分が山中で美しい娘と出会うという貴重な体験をしたことは事実なのだということを確認し、そうした貴重な体験を、あらためて自分一人のものとして心のなかで大切にしていこうとしている。
- ② 村松氏の体験が二十数年前のことだということを考えると、彼が嘘をついていることは間違はなく、彼がなぜそんなことを言うのだろうかと疑問を感じながら、自分の山中での体験のことをつくづくと思い返している。
- ③ 村松氏の話を聞いているうちに、自分の抱いていた気味悪さがますます募ってくるのを感じて恐ろしくなってしまう、美しい風景を思い浮かべることで、なんとか冷静さを取り戻そうとしている。
- ④ 村松氏も自分もほとんど同じ体験をしたことは間違いないが、両者の体験の間に長い時間的隔たりがあるということを考えて、いっそうの気味悪さを実感してしまい、自分がその体験をしたときのことを思い浮かべている。
- ⑤ 村松氏の話を聞いているうち、自分と同じような不思議な体験をした人が二十数年前にもいたということがわかって、妙に納得してしまうような気持ちになり、美しかった谿谷の景色をしみじみと思い出している。

問5

傍線部E「すると石田君は目を光らせて、自分も増富の谿谷に是非とも行くと云い出した。」とあるが、「石田君」についての逸話は、本文全体にどのような効果をもたらしていると考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 「私」の話が怪談であることをはっきりと否定するような人物を登場させることで、物語全体が「私」の妄想にすぎないということを、それとなく読者に伝えるという効果。
- ② 神秘的な物語に惑わされず現実をしっかりと見きわめようとする快活な若者を登場させることで、逆に幻想に取り憑かれている者たちの愚かさを浮かび上がらせるという効果。
- ③ 旺盛な好奇心をもち、出来事を即物的に捉えようとしている人物を登場させることで、物語全体を単なる怪異譚として限定してしまうのではなく、その解釈に広がりをもたせるという効果。
- ④ 「私」たちが神秘的な体験を味わったことの原因を知っている若者を登場させることで、ここまで物語を読み進めてきた読者を、これから始まる謎解きに参加させるという効果。
- ⑤ 「私」たちが味わってきた不思議な体験をあえて検証しに行こうとしている物好きな人物を登場させることで、人間とは未知のものに惹かれる存在であるという主題をさりげなく示すという効果。

問6 この文章の表現に関する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

解答番号は 

19
----

 ・ 

20
----

 。

① 本文中の地の文のなかには比喩的な表現などはいっさい用いられていないが、登場人物の台詞せりふのなかには、61行目の「山と山が手を合わせたように迫っている」や、77行目の「誰かの絵のようだったね」など比喩的な表現が多用されており、そのことによって登場人物の個性がより強く浮かび上がるようになっていく。

② 冒頭から10行目までには、話の舞台となっている谿谷の景観が詳しく描かれているが、「九月だというのに」「若芽」が出ていたり、「岩山」が「突如として聳え」たりしている様子はきわめて非現実的であり、こうした描写によって、「私」の体験が夢にすぎなかったということが読者にさりげなく示されるという仕組みになっている。

③ 15行目、39行目、48行目の垢石老の言葉のなかには「まアるで」とカタカナが用いられており、それが現代的な雰囲気を感じさせるのに対して、12行目の「私」の言葉のなかには「翁や」「あつたかしら」「見たかね」など古文調の言い回しが多用されており、そのことによって二人の性格の対照がより明確にされている。

④ 26・27行目と74・75行目では「二人の娘」の恰好が細かく描写され、80～82行目では娘たちの背負っていた籠の中身のことがやはり詳細に説明されているが、こうした細部の描写によって、奇妙な雰囲気をもった話がよりリアリティのあるものになっている。

⑤ 50行目と88行目にある「――」はここで場面が時間的に転換していることを示すものだが、このことからわかるように、この文章は過去と現在の場面が錯綜さくそうしており、話が進むにつれて過去にさかのぼり、謎が明らかにされていくという独特な構成になっている。

⑥ 59行目と71行目で用いられている「……」は、話をしている「私」の言葉が「村松さん」によって遮られてしまったことを表しており、このことによって、話したいことがあってその気持ちを抑えられずにいる「村松さん」の様子が、

うまく読者に伝わるようになっていく。

第3問 次の文章は『狭衣物語』の一節である。大將は、兄妹同様に育てられた従妹の源氏宮にひそかに思いを寄せていたが、

源氏宮が即位したばかりの帝の妃として入内するという話を聞き、悲嘆にくれる。以下は、帝の即位にもなって賀茂の齋院と  
 なったばかりだった姫宮が、父である一条院が亡くなったことにより、その喪に服するために退任し、その後任として源氏宮が齋  
 院になるかもしれないと取り沙汰される場面から始まる。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点 50）

齋院の御代はりには、一条院の後宮の姫宮ぞ居させ給ひにしが、大膳にわたらせ給ひにしを、還らせ給ひて、齋宮も下りさ

せ給ひぬる代はりに、居させ給ふべき女宮たち、このごろおはしまさざりけり。「源氏宮の御内裏参りやいかなるべきことに

か」と、世の人々やうやう言ひ出づるを、殿にも聞かせ給ひて、「アあなあぢきなや。まだ二葉よりただ人にならせ給ひにしか

ば、今さらに神も公も知り聞こえさせ給ふべきにあらず」とて、思しもかけたらす。さぶらふ人々も内裏わたりの今めかしさを、

いつしかと心もとながり思ふべし。

宮の御かたち、このごろはいとど盛りに整ほりまさらせ給うて、まことに、光るとはこれを言ふべきにやと見えさせ給ふを、

「帝と申すとも、『かかる人世にはおはしましけり』と、さは言ふとも御目はおどろかせ給ひなむかし」と、見奉る限りは言ひあ

はせつつ心もとながるに、宮の御夢に、あやしう心得ずもの恐ろしきさまに、うちしきり見えさせ給ふを、「いかになりぬべき

にか」と、人知れず心細く思しめさるれど、「かうこそ」なども、母宮にも聞こえさせ給はで過ぐさせ給ふに、殿の内におびた

たしき物のさとしのあるを、物問はせ給へば、源氏宮の御年あたらせ給ひて、重くつつしませ給ふべきよしを、あまた申したる

を、いと恐ろしう思しめしおどろきて、さまざまの御祈りども、心ことに始めなどせさせ給ふに、殿の御夢にも、「賀茂より」

とて、禰宜と思しき人参りて、櫛に挿したる文を源氏宮の御方に参らするを、我開けて御覽ずれば、

「神代より標引きそめし櫛葉を我よりほかに誰か折るべき

よしこころみ給へ。さては、いと便なかりなむ」と、たしかに書かれたりと見給ひて、うちおどろき給へる心地、**X** いともの恐

ろしく思されて、母宮・大将などに語り聞こえさせ給ふを、聞き **b** 給ふ心地、<sup>(ウ)</sup> なかなか心やすくうれしくぞなり給ひぬる。

年ごろも、「とやかくやと身一つを思ひくだけながら、さすがに我がものにひき忍びとり隠し **c** 聞こえて、ひたすら深き山里などにもてさすらはむも、あるかひなかるべし。さりとて、親たちの思しよらぬありさまにて、ほのかに見奉りそめても、なかなか心まどひは、いやまさりにこそはあらめ。『さらば、さてもあれ』とは、必ず思し許さぬやうはよにあらじ。さりとて、御心のうちどもには、『思はずにもあるかな』と、事にふれつつ、明け暮れ思し乱れむが、いといとほしう心苦しきぞかし」など、思ひ嘆かれ給へるを、げに神代より筋ことなりける御宿世<sup>すくせ</sup>なりければ、今はなかなか心やすくて、「明け暮れ妬<sup>ねた</sup>うやましき心のうちはあらじ」と、**A** 胸あきぬる心地し給ひながら、「いかに定めて、いかに嘆くにか。あらば逢ふ世の限りだになく、ここの年ごろ我が思ひくだけつる筋は、はるかなるにこそは」と **B** うち思ふは、また様<sup>さま</sup>ことにいみじき心のうちなり。

内裏の御夢などにも、さだかに御覧することありて、思しおどろくに、大殿に語りあはせ聞こえ給ひて、御心のうちどもはいと口惜しけれど、御占<sup>うら</sup>などあるに、公をはじめ奉り、殿の御ためにも、行く末遠くめでたかるべきやうにのみ占ひ申しければ、とかう誰も思し定むべきことならで **Y** 定まり給ひぬるを、世の中には思ひかけずあさましきことにぞ言ひける。

(注)

- 1 齋院——賀茂神社に奉仕する天皇家の未婚の娘のこと。天皇が即位するたびに選ばれる。
- 2 一条院の後宮の姫宮——一条院の娘。帝にとっては妹。
- 3 大膳——大膳職<sup>しき</sup>のこと。役所のひとつで、選ばれた齋院は、まず二年間、精進潔斎するためにここに籠もる。
- 4 齋宮——伊勢神宮に奉仕する天皇家の未婚の娘のこと。賀茂神社の齋院と同じく、天皇が即位するたびに選ばれる。
- 5 女宮——天皇家の娘。
- 6 内裏参り——帝の妃として入内すること。
- 7 殿——大将の父。後出の「大殿」も同じ人物。

8 まだ二葉よりただ人にならせ給ひにしかば——源氏宮が、先帝の娘でありながら、両親と死別したため、幼い頃から皇族を離れ、殿のもとで育てられたことをいう。

9 宮——源氏宮。

10 母宮——大将の母。

11 物のさとし——神仏のお告げ。

12 物問はせ給へば——陰陽師おんようしなどに占わせると。

13 厄年あたらせ給ひて——源氏宮が厄年にあたっていること。厄年は、災難に遭あいやすい年齢。

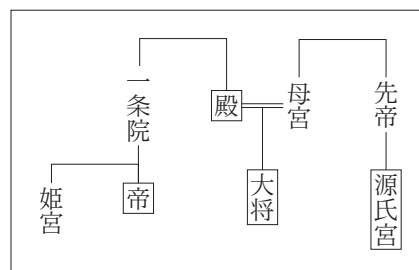
14 賀茂——賀茂神社のこと。上賀茂神社と下鴨神社の総称。

15 禰宜——神社に奉仕する神職の者。

16 榊——神に供える常緑の木。ここは、その枝。

17 標——神社などの聖域を囲う注連縄しめなわ。

18 あらば逢ふ世——「いかにしてしばし忘れむ命だにあらば逢ふ世のありもこそすれ」  
（『拾遺和歌集』恋一・詠み人知らず）を踏まえている。



人物関係図 主要登場人物は□で囲んだ。



問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

21

23

。

(ア)

あなあぢきなや

21

- ① なんとしたことか
- ② やはり思った通りだよ
- ③ さあどうしようか
- ④ ああつまらないことよ
- ⑤ まあどうとでもなれ

(イ)

いつしかと心もとながり思ふべし

22

- ① いつどうなってしまうのかと心配しているだろう
- ② 早く見てみたいと心待ちにしているにちがいない
- ③ いつまで続くことかと不安に感じているようだ
- ④ いつの間に決まったのかと慌てているのだろう
- ⑤ 早くしてほしいと苛<sup>いら</sup>立ちを感じているはずだ

(ウ)

なかなか心やすく

23

- ① いかにも心のどかで
- ② むしろあっけなく
- ③ 少しずつ気が休まり
- ④ ますます気が晴れて
- ⑤ かえってほっとして

問2 波線部 a、c の敬語の説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。 解答番号は

24。

① a 作者から源氏宮への敬意を示す尊敬語

b 作者から殿への敬意を示す尊敬語

c 作者から殿への敬意を示す謙讓語

② a 作者から女宮たちへの敬意を示す尊敬語

b 作者から大将への敬意を示す尊敬語

c 大将から源氏宮への敬意を示す謙讓語

③ a 作者から女宮たちへの敬意を示す尊敬語

b 作者から殿への敬意を示す謙讓語

c 大将から殿への敬意を示す謙讓語

④ a 作者から女宮たちへの敬意を示す尊敬語

b 作者から源氏宮への敬意を示す尊敬語

c 作者から大将への敬意を示す謙讓語

⑤ a 作者から源氏宮への敬意を示す尊敬語

b 作者から大将への敬意を示す謙讓語

c 大将から源氏宮への敬意を示す謙讓語

問3 傍線部X「いともの恐ろしく思われて」とあるが、殿はどうしてこのように思ったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

25。

- ① 邸を訪ねてきた賀茂神社の禰宜から、源氏宮は帝の在位中は齋院として賀茂神社に仕えなければならないので、今進めている入内の計画はあきらめるべきだ、と突然告げられたから。
- ② 賀茂神社の神から、あなたは齋院になることを長年私に約束していたのに、今になって入内を望むのなら必ずや天罰が下るだろう、という趣旨の手紙が届いた、と源氏宮が知らせてきたから。
- ③ 賀茂神社の神から源氏宮に宛てた手紙に、あなたを齋院にするつもりで今まで大切に見守ってきたのに、入内するなら不都合なことになるだろう、と書かれているのを、夢の中で見たから。
- ④ 賀茂神社の禰宜が夢の中でよこした手紙に、何者かが神に捧げる榊を折ったのでよくないことが起こるだろう、と記されていたため、源氏宮の入内の話はうまくいかないのではないかと感じたから。
- ⑤ 夢の中で賀茂神社の神から源氏宮の入内は不吉だというお告げを受けたが、そのお告げに従って準備万端整っていた源氏宮の入内を突然取りやめたら、帝の怒りを買うにちがいないから。

問4

傍線部A「胸あきぬる心地し給ひながら」・B「うち思ふ」とあるが、それぞれの大將の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

① Aでは、源氏宮が齋院になり、それによって入内が中止になると、帝への嫉妬に苛まれることもないだろうと心が軽くなったが、Bでは、源氏宮が齋院になってしまうと、長年思いを寄せていた源氏宮と結ばれることがますます難しくなるだろうと、これまでとは違う新たな苦悩が生じている。

② Aでは、源氏宮が齋院になることは前世から決まっていた神の意向なのだから、自分や両親がどうあがいてもしかたがないことだとあきらめようとしているが、Bでは、帝が源氏宮を入内させることを断念してくれたら、自分にも源氏宮と結婚する可能性があるのではないかと、一縷の望みを抱いている。

③ Aでは、自分が源氏宮と結ばれる運命でないことがはっきりわかったので、源氏宮が齋院になろうが入内しようがどうでもよいと自暴自棄に陥っており、Bでは、生きていればいつかは源氏宮と結ばれるかもしれないというわずかな希望も失って、源氏宮を思っ苦しんだこれまでの日々を、むなしく感じている。

④ Aでは、入内が決まって源氏宮と会えなくなつて以来、明けても暮れても帝を妬ましく思っ心をはたしており、Bでは、源氏宮が齋院として神に仕えることになつても、思い通りにならない恋に苦しむ自分の状況は変わらないにちがいないので、この苦悩はいつまでも続くのだと、悲嘆にくれている。

⑤ Aでは、神にも帝にも選ばれた源氏宮とはとうてい釣り合わない身の程を思い知らされ、何も考えられず茫然とした気持ちになっているが、Bでは、長年の源氏宮への思いはこの世では成就しないことを悟り、せめて来世では結ばれるように仏道修行に励むべきだと、自らに言い聞かせている。

問5 傍線部Y「定まり給ひぬる」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選

べ。解答番号は 27。

- ① 帝は、齋院の候補について夢で見たことを殿に相談したところ、殿からも同じ夢を見たと言われたので、不思議に思つて夢占いをさせると、源氏宮を齋院にしないのなら帝と殿には必ず凶事が起こるだろうと判断されたということ。
- ② 帝と殿は、同じ時期に夢を見たので、不思議に思つて夢占いをさせたところ、源氏宮が入内すると皇室も殿の一族も子々孫々まで繁栄するとの判断だったので、誰も反対する者はいなくて、源氏宮の入内が決まったということ。
- ③ 帝は、源氏宮の夢を見て目を覚ました後、それについて殿に相談しても適切な意見が得られなかったので、その夢が意味することを占わせてみた結果、源氏宮を齋院にするべきだと言われ、そのように決意を固めたということ。
- ④ 殿が、自分が見た夢の内容と帝の夢占いの結果を考え合わせると、源氏宮の入内を強行するのは夢を無視することになり、その結果、源氏宮に不吉なことが起こるかもしれないと考え、源氏宮を齋院にすることに同意したということ。
- ⑤ 帝が、自らの見た夢の吉凶を、殿と相談したうえで占わせたところ、源氏宮が齋院になることで帝にも殿にもすばらしい将来が約束されるという判断だったので、誰も異議を唱えることはできず、源氏宮が齋院に決定したということ。

問6

この文章の内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

28。

① 殿は、源氏宮が齋院になる可能性が生じた際に、「御内裏参りやいかなるべきことにか」と源氏宮の入内を推し進めようとする人々の声を耳にして、「今さらに神も公も知り聞こえさせ給ふべきにあらず」と自分でも源氏宮をどうすればよいのかわからなくなった。

② 人々は、帝について、その容姿は「まことに、光るとはこれを言ふべきにや」というほど美しく、代々の帝の中でも「かかる人世にはおはしましけり」と感動するほどすばらしいと褒めたたえ、入内は源氏宮にとってまたとない幸運であるから、是非とも早く実現させるべきだと噂した。

③ 源氏宮は、度重なる夢を「いかになりぬべきにか」と心細く思いつつも、それを人に語ることはなかったのだが、「殿の内におびたたしき物のさとし」があつたことを不審に思う母宮から強く問いただされて、恐ろしい夢を見たので厄除けの祈りをさせてほしい、と打ち明けた。

④ 大將は、叶わぬ恋に苦しみ続け、「親たちの思しよらぬありさまにて」源氏宮と契りを結ぼうかとまで考え、また、たとえそうなつてもきつと両親に許してもらえらうと期待したが、一方では、そのために「思はずにもあるかな」と両親が苦しむことになるだろうとも思い、ずっと逡巡していた。

⑤ 源氏宮は、かつては大將から思いを寄せられて当惑していたが、その後、帝への入内が予定され、そして今また齋院として神に仕える話が持ち上がって、「げに神代より筋ことなりける」我が身の境遇を痛感するとともに、男女の仲は本当に「思ひかけずあさましきこと」だと思い知った。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

第4問

次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。（設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。）  
（配点 50）

善<sup>キ</sup>乎<sup>かな</sup>、葉<sup>（注1）</sup>正<sup>せい</sup>則<sup>そく</sup>之言<sup>ヤ</sup>。日<sup>ハク</sup>、「今天<sup>（注2）</sup>下官<sup>ニ</sup>無<sup>クシテ</sup>封<sup>（注3）</sup>建<sup>ニ</sup>而吏<sup>（注4）</sup>有<sup>リト</sup>封<sup>ニ</sup>建<sup>ニ</sup>。」州<sup>（注5）</sup>県<sup>（注6）</sup>之<sup>（注7）</sup>敝<sup>（注8）</sup>、吏<sup>（注9）</sup>胥<sup>（注10）</sup>窟<sup>（注11）</sup>穴<sup>（注12）</sup>其<sup>（注13）</sup>中<sup>（注14）</sup>、父<sup>（注15）</sup>以<sup>（注16）</sup>是<sup>（注17）</sup>伝<sup>（注18）</sup>之<sup>（注19）</sup>子<sup>（注20）</sup>、兄<sup>（注21）</sup>以<sup>（注22）</sup>是<sup>（注23）</sup>伝<sup>（注24）</sup>之<sup>（注25）</sup>弟<sup>（注26）</sup>。而<sup>（注27）</sup>其<sup>（注28）</sup>尤<sup>（注29）</sup>桀<sup>（注30）</sup>黠<sup>（注31）</sup>者<sup>（注32）</sup>、則<sup>（注33）</sup>進<sup>（注34）</sup>而為<sup>（注35）</sup>院<sup>（注36）</sup>司<sup>（注37）</sup>之書<sup>（注38）</sup>吏<sup>（注39）</sup>、以<sup>（注40）</sup>掣<sup>（注41）</sup>州<sup>（注42）</sup>県<sup>（注43）</sup>之權<sup>（注44）</sup>。上<sup>（注45）</sup>之<sup>（注46）</sup>人<sup>（注47）</sup>明<sup>（注48）</sup>知<sup>（注49）</sup>其<sup>（注50）</sup>為<sup>（注51）</sup>天<sup>（注52）</sup>下<sup>（注53）</sup>之<sup>（注54）</sup>大<sup>（注55）</sup>害<sup>（注56）</sup>、而<sup>（注57）</sup>不<sup>（注58）</sup>能<sup>（注59）</sup>去<sup>（注60）</sup>也。使<sup>（注61）</sup>官<sup>（注62）</sup>皆<sup>（注63）</sup>千<sup>（注64）</sup>里<sup>（注65）</sup>以<sup>（注66）</sup>内<sup>（注67）</sup>之<sup>（注68）</sup>人<sup>（注69）</sup>、習<sup>（注70）</sup>其<sup>（注71）</sup>民<sup>（注72）</sup>事<sup>（注73）</sup>、而<sup>（注74）</sup>又<sup>（注75）</sup>終<sup>（注76）</sup>其<sup>（注77）</sup>身<sup>（注78）</sup>任<sup>（注79）</sup>之<sup>（注80）</sup>、則<sup>（注81）</sup>上<sup>（注82）</sup>下<sup>（注83）</sup>弁<sup>（注84）</sup>而<sup>（注85）</sup>民<sup>（注86）</sup>志<sup>（注87）</sup>定<sup>（注88）</sup>矣<sup>（注89）</sup>、文<sup>（注90）</sup>法<sup>（注91）</sup>除<sup>（注92）</sup>而<sup>（注93）</sup>吏<sup>（注94）</sup>事<sup>（注95）</sup>簡<sup>（注96）</sup>矣<sup>（注97）</sup>。官<sup>（注98）</sup>之<sup>（注99）</sup>力<sup>（注100）</sup>足<sup>（注101）</sup>以<sup>（注102）</sup>御<sup>（注103）</sup>吏<sup>（注104）</sup>而<sup>（注105）</sup>有<sup>（注106）</sup>余<sup>（注107）</sup>、吏<sup>（注108）</sup>無<sup>（注109）</sup>所<sup>（注110）</sup>以<sup>（注111）</sup>把<sup>（注112）</sup>持<sup>（注113）</sup>其<sup>（注114）</sup>官<sup>（注115）</sup>而<sup>（注116）</sup>自<sup>（注117）</sup>循<sup>（注118）</sup>其<sup>（注119）</sup>法<sup>（注120）</sup>。昔<sup>（注121）</sup>人<sup>（注122）</sup>所<sup>（注123）</sup>謂<sup>（注124）</sup>養<sup>（注125）</sup>百<sup>（注126）</sup>万<sup>（注127）</sup>虎<sup>（注128）</sup>狼<sup>（注129）</sup>於<sup>（注130）</sup>民<sup>（注131）</sup>間<sup>（注132）</sup>者<sup>（注133）</sup>、將<sup>（注134）</sup>一<sup>（注135）</sup>旦<sup>（注136）</sup>而<sup>（注137）</sup>尽<sup>（注138）</sup>去<sup>（注139）</sup>。治<sup>（注140）</sup>天<sup>（注141）</sup>下<sup>（注142）</sup>之<sup>（注143）</sup>愉<sup>（注144）</sup>快<sup>（注145）</sup>、孰<sup>（注146）</sup>過<sup>（注147）</sup>於<sup>（注148）</sup>此<sup>（注149）</sup>。

（顧炎武『亭林文集』による）



(注)

- 1 葉正則——南宋の文人、葉適のこと。「正則」は字。あざな
- 2 官——中央から派遣される上級役人。
- 3 封建——ここでは、地位や役職が世襲されること。
- 4 吏——現地採用される下級役人。
- 5 敝——弊害。
- 6 吏胥——「吏」と同じ。
- 7 窟穴——根城とする。縄張りとする。
- 8 桀黠——悪賢い。
- 9 院司之書吏——地方の民事・財政・司法の文書を管理する下級役人。
- 10 掣——掌握する。
- 11 弁——職分をわきまえる。
- 12 文法——わずらわしい法規。

問1

傍線部(1)

「御」・(2)

「循」

の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

。

解答番号は

29

・

30

(1)

29 「御」

- ⑤ 容認する  
④ 処罰する  
③ 抜擢ばつてきする  
② 統率する  
① 勧告する

(2)

30 「循」

- ⑤ 加える  
④ 従う  
③ 慣れる  
② 逆らう  
① 頼る

問2 傍線部A「使官皆千里以内之人、習其民事、而又終其身任之」の返り点の付け方とその読み方として

最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

- ① 使<sub>レ</sub>官皆千里以内之人、習<sub>二</sub>其民事<sub>一</sub>、而又終<sub>二</sub>其身任<sub>レ</sub>之  
官をして皆千里以内の人を<sup>つかひ</sup>使とせしめば、其の民事に習ひ、<sup>しか</sup>而も又た其の身を<sup>を</sup>終ふるまで之に任じて
- ② 使<sub>二</sub>官皆千里以内之人<sub>一</sub>、習<sub>二</sub>其民事<sub>一</sub>、而又終<sub>二</sub>其身任<sub>レ</sub>之  
官の皆千里以内の人を<sup>しかう</sup>使せしめ、其の民事を習ひ、<sup>つひ</sup>而して又た終に其の身もて之に任ぜしめば
- ③ 使<sub>二</sub>官皆千里以内之人<sub>一</sub>、習<sub>二</sub>其民事<sub>一</sub>、而又終<sub>二</sub>其身任<sub>レ</sub>之  
官をして皆千里以内の人にして、其の民事に習はしめ、<sup>しか</sup>而も又た其の身を終ふるまで之に任ずるは
- ④ 使<sub>下</sub>官皆千里以内之人、習<sub>二</sub>其民事<sub>一</sub>、而又終<sub>二</sub>其身任<sub>レ</sub>之  
官をして皆千里以内の人にして、其の民事に習ひ、<sup>しか</sup>而して又た其の身を終ふるまで之に任ぜしめば
- ⑤ 使<sub>下</sub>官皆千里以内之人、習<sub>二</sub>其民事<sub>一</sub>、而又終<sub>二</sub>其身任<sub>レ</sub>之  
官は皆千里以内の人をして、其の民事を習ひ、<sup>しか</sup>而して又た終に其の身を之に任ぜしめば

問3 傍線部B「吏無所以把持其官」の書き下し文として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解

答番号は 32。

- ① 吏其の官を把持する所以無くして
- ② 吏無くして其の官を把持する所以あるも
- ③ 吏所以無くして其の官を把持すれば
- ④ 吏其の把持する所以の官無くして
- ⑤ 吏把持する所以無くして其の官あらば

問4 傍線部C「虎狼」とあるが、これは何を喩えたものか。最も適当なものを、文中の波線部a～eで答えるとするればどれか。次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① a 吏胥
- ② b 州県之権
- ③ c 民志
- ④ d 官之力
- ⑤ e 其法

問5 傍線部D「将ニ一旦而尽去」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

34。

- ① ひとまずはすべてを消しさるべきである
- ② ひとまずすべてを取り除くのがよい
- ③ すぐに跡形もなく消えうせるであろう
- ④ すぐに跡形もなく消えうせるわけではない
- ⑤ いつかはすべてを取り除く必要がある

問6 傍線部E「治天下之愉快、孰過於此」の読み方と筆者の主張の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の

うちから一つ選べ。解答番号は 35。

① この文は、「天下の愉快を治むる、孰か此を過<sup>たれ</sup>たん<sup>あやま</sup>」と訓読し、「統治が安定している地方なら、誰も誤りを犯したりはしない」と述べる筆者は、「吏胥」が「州県之権」を独占することを問題視しつつも、それを排除する手立ては容易に見つかるものではないと解決の難しさを指摘している。

② この文は、「天下の愉快を治むる、孰か此を過<sup>こ</sup>ぐる<sup>す</sup>」と訓読し、「統治が安定している地方を、誰か訪れたことがあるのか」と述べる筆者は、「吏胥」の「州県之権」の独占は、全国規模の問題であり、すぐさま官の権限を拡大しないと状況は悪くなるばかりだと警鐘を鳴らしている。

③ この文は、「天下を治むるの愉快、孰れか此に過<sup>いづ</sup>ぎんか<sup>こ</sup>」と訓読し、「世を統治する楽しみを、この地域以上に味わえるところがあるのだろうか」と述べる筆者は、確かに「吏胥」の専権は存在するものの、他の「州県」に比べればまだと現状を受け入れるように促している。

④ この文は、「天下を治むるの愉快、孰か此に過<sup>こ</sup>るや<sup>よき</sup>」と訓読し、「世を統治する楽しみを、味わった者がいるのか」と述べる筆者は、「州県」における「吏胥」の専権は一地方に限ったことではなく、世の至るところで為政者は善政の実現に苦心していると窮状を訴えている。

⑤ この文は、「天下を治むるの愉快、孰れか此に過<sup>これ</sup>ぎん<sup>こ</sup>」と訓読し、「世を統治する楽しみは、これに尽きるであろう」と述べる筆者は、「吏胥」の「州県之権」を排除し、地域の事情に通じた官が「吏胥」を適切に管理することができこそ善政がもたらされると唱えている。

問7 筆者が冒頭に葉正則の発言を引用した意図の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番

号は 36。

- ① 筆者は葉正則の言葉に納得して、自分の議論の出発点としてしようとしている。
- ② 筆者は葉正則の言葉に感銘を受けて、自分の主張の結論としてしようとしている。
- ③ 筆者は葉正則の言葉に共感しつつも、反論の余地を見出そうとしている。
- ④ 筆者は葉正則の言葉に疑問を抱きながらも、自分の考察の論拠にしようとしている。
- ⑤ 筆者は葉正則の言葉に反発を覚えたため、徹底的に批判の対象にしようとしている。

